

陽關詞 三首 其三

熙寧十年八月十五日（一〇七七）

中秋月

暮雲收盡溢清寒 暮雲 収まり尽きて 清寒溢る

銀漢無聲轉玉盤 銀漢 声無く 玉盤転ず

此生此夜不長好 此の生 此の夜 長えには好からず

明月明年何處看 明月 明年 何れの処にか看ん

【語釈】夕暮れの雲はすっかりどこかに消えてゆき、夜の清らかな寒気があふれる。天の川には音もなく、白玉の盤のような月がころがるように移り行く。私のこの一生、そしてこの夜、いつまでも良いままではいられない。この明月を来年、いつたいてどこで見ることになるやら。

この時は弟の轍とともに徐州で中秋の月を見る事ができた。だが、ともに中秋の月を見られるのも、今度だけかもしれない。来年はいつたいてどこでこの月を見ることになるのかと、東坡の感傷はつきない。

熙寧十年八月十五日、弟の轍と共に彭城で月を観てこの詩を作り、陽關三疊の調子で歌ったと、自ら記している。

陽關詞：王維の渭城曲、「送元二使安西」の曲調、陽關三疊。

第二句以下の三句を二度繰り返すといふ意味であるが、第四句を三度繰り返すという説もある。

